

唯識思想における増益と損減について¹⁾

——三性説との関わりを中心として——

薊 法 明

1 はじめに

唯識思想において、増益 (samāropa, adhyāropa, sgro 'dogs pa, sgro btags pa) とは、「無であるものを有であると誤認すること」であり、損減 (apavāda, skur pa 'debs pa) とは、「有であるのに無であると誤認することである²⁾」。

増益と損減は唯識派であれ、中観派であれ、空を理解する場面で多く用いられ、また、特に唯識派では、三性説を説く場面で用いられていることが重要であると考えられる。そこで、今回は増益と損減が三性説と関連されて述べられている論書を中心に以下に考察を行い、三者の関係を調べてみたい。

2・1 唯識思想における増益と損減の定義 (『大乘莊嚴經論』X 1・20-22)

na bhāvas tatra cābhāvo nābhāvo bhāva eva ca/ bhāvābhāvāviśeṣaś ca māyādiṣu vidhīyate//20//
tathā dvayābhatātrāsti tadbhāvaś ca na vidyate/ tasmād astitvanāstitvaṃ rūpādiṣu vidhīyate //21//
na bhāvas tatra cābhāvo bhāva eva ca / bhāvābhāvāviśeṣaś ca rūpādiṣu vidhīyate //22//
samāropāpavādāntapratīṣedhārtham iṣyate / hinayānena yānasya pratīṣedhārtham eva ca //23//³⁾

2・2 増益・損減と三性説の一般的な関係 (『聖楞伽經』II・191, X・305)

nāsti vaikalpito bhavaḥ paratantraś ca vidyate/samāropāpavādaṃ hi vikalpo bhramate nṛnām//⁴⁾

遍計所執性は無であり、依他起性は有である。増益と損減との極端論を考える人は捨てられるのである。

3 唯識論書における増益・損減と三性説の関係

A 『解深密經』Samdhinirmocanasūtra (SNS.)

SNS. において増益・損減と三性説の関係については、離れた場所において二箇所記述がある⁵⁾。それによると損減の対治としては依他起性と円成実性における遍計所執性は存在しないとする記述と、依他起性における遍計所執性はしないとする記述に分かれる。増益の対治としては二箇所とも依他起性・円成実性・遍計

所執性は存在するとしとしている。

B 『瑜伽師地論』 *Yogācārabhūmiśāstra* (YBh.)

Ybh. の真実義品の中で、三性の契機となる語が増益と損減と関連付けられて述べられているとされている⁶⁾。以下にその部分を示す。

色等と名付けられる事物において「[これは] 色である」というような、仮設された言語を本質とする諸法は、存在しない。この故に、色等と名付けられる事は、仮設された言語を本質とする諸法については空である。では、色等と名付けられる事物においてそこに残されているものは何か？すなわちそれは色等と名付けられる事物の所依に他ならない。そのことにより両者を如実に知る、すなわち存在している「事物のみ」と「事物のみ」ということの上にある、「ただ言葉による表示のみ」ということを。そして、実無を増益せず、実を損減せず、増やしもせず、減しもせず、とりもせず、捨てもせず、如実に、言葉からはなれることを本質とする真如を知る⁷⁾。

下線部 a, b, c は、順に、三性の遍計所執性・依他起性・円成実性に相当する。そこで、問題となるのが、増益と損減の対治 (pratipakṣa) である。この時、増益の対治は、仮設された言語を本質とする諸法は実在するわけではないと見ることであり、一方、損減の対治は、色等と名付けられる事物の所依は、無いわけではないと見ることである。次に「摂決択分中間所成慧地」における三者の関係であるが、以下の様に述べられている。

そこで、依他起性と円成実性において、遍計所執性に執着するそのことは、増益の極端論であると知られるべきである⁸⁾。

損減の極端論は、依他起性と円成実性が存在しないと自相を損減するのである⁹⁾。

C 『中辺分別論』 *Madhyāntavibhāga* (MVbh.)

MVbh. では第3章の第4偈と第5偈の前半及び、世親の長行において、三性と増益と損減との関係が述べられている¹⁰⁾。三性の真実の相は、それぞれ二種類の誤認をはなれることであるとしている。次に、第五章の安慧の注釈においては、増益の対治として遍計所執性は存在しないということが述べられており、損減の対治は依他起性と円成実性は存在するという記述がある¹¹⁾。

D 『大乘莊嚴經論』 *Mahāyānasūtrālaṅkāra* (MSA.)

MSA. では、第11章の19～22偈によって依他起性である、虚妄分別における有・無・有無が、幻術の譬えによって説明されており、そして、23偈と長行において増益と損減についての記述が為されているが、偈と長行からだけでは、増益と損減の対治は何であるのかということと、二者（増益と損減）と三性との関係

が見えてこない。このことについて述べられている安慧と無性の注釈部分¹²⁾によると、安慧の方は、増益の対治として遍計所執性は勝義としては存在しないことであり、損減の対治は遍計所執性は世俗としては存在するということである。一方、無性の注釈においては増益の対治としては依他起性における遍計所執性は存在しなく、損減の対治は依他起性は存在するということである。

E 『摂大乘論』 *Mahāyānasamgraha* (MS.)

MS. は第 2 章 21 偈では十種類の散乱した分別があげられており、第 22 偈の前半部分では、その散乱を対治をするものは『般若経』にとかれた無分別智であると述べ、ついで後半部分では、十種の散乱の一行に『般若経』の文を配当している¹³⁾。その十種の散乱の中の三番目と四番目に増益散動と損減散動が配置されている。増益と損減の対治について述べられている。世親と無性の注釈によると、増益の対治は、色いいわゆる遍計所執性は存在しないことであり、損減の対治は法性、すなわち円成実性は存在することである。

4 比較検討

先ず、*Ybh.* においては、上記に挙げた通り、下線部 a, b, c が三性に基本的には相当していると考えられる。しかし、一方この部分は既に指摘されているが、『小空経』(Cūḷasuññatāsutta¹⁴⁾) に由来すると考えられる空性の定型的表現¹⁵⁾、すなわち、「A に B がいないならば、A は B について空である。さらに Aに残っている C は存在する。」という表現が上記の *Ybh.* の部分に当てはまる¹⁶⁾。A, B, C はそれぞれ依他起性、遍計所執性、円成実性であり、これを *Ybh.* にあてはめると、A は rūpamityevamādi prajñākam vastu であり、B は rūpamityevamādi prajñāptivādātmano dharmah であり、C は rūpamityevamādi prajñāptivādātman となる。そうなると、増益の対治は、両方とも「遍計所執性は存在しないと見ること」であるが、損減の対治は、「依他起性は無いわけではないとみること」と「円成実性は無いわけではないとみること」と二通りの解釈が可能である。これは、空の理論に基づいて考えた場合と、真如は円成実性であるとする立場の違いによるものであるが、両方とも解釈が可能であると考えられる。

SNS. については、増益を説く部分では依他起と円成実性における遍計所執性の無を述べており、損減の部分では、三性は存在すると述べている。次に、*MVbh.* では三性それぞれに、増益と損減が存在するとして、それを対治することにより、三性それぞれが真実の姿になるとしている。次に *MSA.* では、直接三性と増益と

損減の関係は言及されていないが、その注釈書である *MSAT.* と *BAVBh.* においてそれらの関係が述べられていた。それによると、ともに増益の対治は、外の対象、つまり遍計所執性は存在しないと考えることであり、損減の対治は、二の顕現、すなわち依他起性は存在すると考えることである。

最後に、*MS.* では *MSBh.* と *MSU.* によると、増益の対治は遍計所執性は存在しないと〔理解すること〕であり、損減の対治は、依他起性は存在すると〔理解すること〕である。三性と増益と損減の関係の上記に挙げた論書等での違いを表にする。

増益と損減の対治の観点から		
	有	無
<i>LAS.</i>	依他起性	遍計所執性
<i>SNS.</i> type I	依他起性, 円成実性, 遍計所執性	依他起性と円成実性における遍計所執性
type II	依他起性, 円成実性, 遍計所執性	依他起性における遍計所執性
<i>YBh.</i> type I	依他起性	遍計所執性
type II	円成実性	遍計所執性
type III	依他起性 円成実性	遍計所執性
<i>MVBh.</i>	依他起性 円成実性	遍計所執性
<i>MSA.</i> 無性	依他起性	依他起性における遍計所執性
安慧	遍計所執着性 (世俗)	遍計所執性 (勝義)
<i>MS.</i>	円成実性	遍計所執性

5 まとめ

唯識思想の中で増益と損減を用いて三性を述べる場合、三性のうちで、何が存在し、何が存在しないのか、という点が重要である。この点についての先行研究が少ない為用例をあらって見た。そこで、わかった点は論書等によって損減の対治の場面で、円成実性を用いる場合と依他起性を用いる場合に分かれているということである。つまり、依他起性の存在を認めるか、依他起性ではなく円成実性の存在とするか、その両方を認めるかにより意味合いが違う。中観派が唯識派を批判するものの一つに、依他起性の存在を認めている点が上げられるが、主に空について述べる場面や、『般若経』を用いてこれらを説明する場合は、依他起性の存在には触れず、その他の該当部分では、依他起性の存在を認める見解をしめていることは重要であると考え。次に、*YBh.* においては、可能性として二種

類の解釈が考えられ、それぞれが依他起性と 円成実性の存在を認めるという形式を取っている点が重要である。

- 1) この内容については、著者が本年の 3 月 29 日に東京で行われた、第 19 回国際宗教学宗教史学会にて発表した。“A propos de *samāropa* et d’*apavāda* sur la doctrine Rien-que-conscience” の内容について、別の資料等を加え再検討を試みたものである。
- 2) 中村元『佛教語大辞典』883, 893 頁。
- 3) *MSA*. XI, p.59, l.22-p.60,l.13., 大正 31 卷 611 頁下 -612 頁上。
- 4) *LAS*. p.131, 304. 大正 16 卷, 539 頁下。
- 5) *SNS*. pp.77, *SNS.H*. 147-148 頁。 *SNS*. pp.70-71, *SNS.H*. 180-181 頁。
- 6) 竹村牧男『唯識三性説の研究』春秋社, 1995 年, 54-56 頁。
- 7) *Wo*.p.47, l.20-48,l.5 *Du*.p.32,l.12-20. 大正, 30 卷, 489 頁上。
- 8) *Vis*.X, P.201b8. 大正, 30 卷, 656 頁下。
- 9) *Vis*.X, P.202a2-3. 大正, 30 卷, 656 頁下。
- 10) *MVBh*.p.38, l/10-19. 大正, 31 卷, 455 頁中, 469 頁上。
- 11) *MVT*. Y.p.243l.4-17.
- 12) P.Vol.122,197b4-198a4. P.Vol.98,87a4-b1,97a3-b2
- 13) この『般若経』からの引用文について、現在見ることにできる『般若経』のどの文章に相当するか問題になっている。この点については、長尾雅人『撰大乘論 和訳と注解』上, 講談社, 1982 年, 41-47 頁。を参照されたし。
- 14) *Majjimanikāya*, No, 121
- 15) 袴谷憲昭・荒井裕明校注『新国訳大蔵経 瑜識 12 大乘莊嚴經論』蔵出版, 1993 年, 49-50 頁。
- 16) 同上。

略号及び使用テキスト

- BBh.Du.* *Bodhisattvabhūmi* Being the 15th Section of Asaṅgapāda's *Yogācārabhūmi*, ed.by N.Dutt, Tibetan Sanskrit Works Series. Vol.7, Patna, 1966.
- BBh.Wo.* 萩原雲来編『梵文菩薩地経』, 山喜房仏書林, 1971 年。
- LAS.* *Laṅkāvatārasūtra*, Nanjio's ed. the otani university press, 1956.
- MVBh.* *Madhyāntavibhāga-Bhāṣya*, A Buddhist Philosophical Treatise, ed. by G. M. Nagao, Tokyo, 1964.
- MVT. Y.* *Sthiramati, Madhyāntavibhāgaṭīkā*, Exposition Systématique du Yogācāravijñaptivāda, éd. par S. Yamaguchi, Nagoya, 1934.
- SNS.* *Samdhinirmocanasūtra*, éd. tr. par E. Lamotte, Louvain, 1935.
- ViS. I-XVII* *Rnal 'byor spyod pa'i sa nram par gtan la dbab pa bsdu ba (Yogācārabhūmi-Viniścayasamgrahaṇī)*, P. No. 5539 (Vol.110), D. No. 4038 (Vol. 38-39)

〈キーワード〉 唯識, 増益, 損減, 三性説

(佛教大学研究員)

states in the *Abhidharmakośabhāṣya* that the *ātman* is equated with *pudgala*, *jīva*, *sattva*, etc. In the early stage of Abhidharma Buddhism, these terms represented the person as a provisional designation and as being distinct from the *ātman*. After that, in the *Jñānaprasthāna*, they became synonymous with *ātman* under the influence of the Pudgalavādins. This identification of the *ātman* and those terms should be thought of as a surprising change in the history of Buddhist thought which denied the *ātman*. Moreover, this identification also influenced Mahāyāna Buddhism.

182. *Samāropa* and *Apavāda* in the Doctrine of the Three Self-natures

Noriaki AZAMI

In this paper, I study the doctrine of the Three Self-natures (*trisvabhāva*) in the philosophy of Consciousness-only, and focus more particularly on *samāropa* (*sgro 'dogs pa* 増益) and *apavāda* (*skur pa 'debs pa*, 損減). In the doctrine of Consciousness-only, *samāropa* means 'to see something in the non-existent'. According to the Yogācāra school, *samāropa* and *apavāda* are frequently mentioned in commentaries on emptiness. The Yogācāra school stresses the importance of the fact that these two notions should be used in the commentaries on the Three Self-natures. This paper examines several commentaries dealing with the relationship between *samāropa* and *apavāda* and the Three Self-natures in order to better understand this relationship.

183. On the *Śālistambasūtra* in the *Tattvasaṃgrahapañjikā*

Shinsei FUJII

The following expression of the *Śālistambasūtra* (ŚSS) *sa ca ayam añkura svayaṃ kṛto - nāpyahetuḥ samutpanna* (A1) is quoted in the avayavārtha of Kamalaśīla's *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) GOS [11:1-2] (B) [13:18-19]. ŚSS contains a phrase similar to (A1) in its adhyātmika - pratīyasamutpāda, *nāmarūpāṅkuro svayaṃkṛto* (A1). In this thesis I intend to investigate Kamalaśīla's quotation of ŚSS in TSP.